

ギムネマ茶飲用時の呼気ガス代謝並びに甘・鹹弁別閾について
○宮川豊美 田中由香 川村一男 (和洋女大)

目的 ギムネマ酸は、古くから甘味感覚の抑制作用があることで知られ、また近時は、糖吸収抑制作用も言われている。私共は昨年の本学会で、市販ギムネマ茶浸出液を口に含むことによって、30分間の甘味感覚の抑制がみられ、さらに1カ月間飲用し、血糖値、インスリン値、体重、体脂肪量等には何の影響もみられなかったことを報告した。今回は、ギムネマ茶を飲用した時の呼気ガス代謝を観察することにより検討を行った。また、甘・鹹味弁別閾値について昨年に続いて検討を行った。

方法 被験者は健康な20~22才女子学生である。呼気ガス代謝は、食後3時間以上経過時に対照値測定の後、ギムネマ茶もしくは白湯を飲用し、飲用30分後から30分毎に120分までの呼気を採取し測定した。また何も飲用しない状態でも同様の経過で観察した。ギムネマ茶(k穀粉)は、4gを200mlの熱湯で5分間浸漬し、白湯共に200ml飲用した。弁別閾は、甘・鹹対照値測定後ギムネマ茶10ml(37℃)を口中に1分間よく含んだ後排出し、直後、5分後の閾値を測定した。実験期間は平成7年5~12月である。

結果 呼気ガス代謝については、ギムネマ茶飲用時のガス交換比平均は、0.82~0.97、白湯飲用時0.83~0.88、非飲用時0.83~0.90の範囲であった。消費エネルギー(Kcal/分)は、ギムネマ茶飲用時0.89~1.00、白湯飲用時0.90~1.09、非飲用時0.89~0.95であった。また、弁別閾は、甘味では飲用直後0.2%閾値の上昇をみたが、5分後にはほぼ飲用前値に戻った。鹹味については対照時に比し、飲用直後、5分後共に有意な差は認められなかった。以上のことから、ギムネマ茶の糖吸収抑制作用はないものと考えられる。